



扉を

INTERVIEW

開く

シューズ職人

Hitoshi Minura

# 三村仁司

北京オリンピックの開幕が間近に迫ってきた。このオリンピックを特別の思いで迎える人がある。アシックスでフットウエア事業部カスタムデザイングループのリーダーを務める三村仁司氏だ。三村氏は女子マラソンの日本人メダリスト、有森裕子、高橋尚子、野口みずき選手らのシューズを作ったことで知られるが、そのほかにも世界の一流選手のシューズをカスタムメイドで提供する、まさに「スポーツシューズの名工」。三村氏の歩んできた道と、モノづくりにかける情熱について、インタビューした。

# 「僕はシューズで金メダルを狙う」

## 選手経験を生かせる道を選ぶ

——今年は北京オリンピックを控え、注目の女子マラソンをはじめとして三村さんのシューズを目にする機会が増えますね。まず、三村さんがスポーツシューズと出合うきっかけについてお聞かせください。

三村 僕は中学・高校時代、陸上の選手でした。高校は飾磨工業高校というところでけっこう名門だったんです。中学ではいい成績を上げていた僕でも、高校に入ってみれば周りにはもっと優秀な選手ばかり。才能がなければ練習だ、ということでは、本当に一所懸命練習して、三年生の時にはキャプテンを任されるようになりました。

当時の悩みが靴。そのころは布

製で、少し走ると穴が開くようなものしか売っていなかったんです。おまけに学校のトラックが二〇〇メートルで、カーブがきついもんですから、すぐ外側の小指のところが破れたりしていたんですよ。親はいくらでも靴は買ってくれました。でもばからしいでしょ。一足八〇〇円もしたんだから。大卒の先生の初任給が一万六〇〇〇円程度だった時代に靴代が一カ月で一六〇〇円要るなんてね。それで僕はおふくろに継ぎを当ててもらって履いていたりしたんです。

高校卒業後の進路が話題になる頃、僕のところにも大学の陸上部から勧誘が来ました。ところが僕は勉強が大嫌い。大学に進学してこれ以上勉強するのはごめんだ

と、就職を希望しました。先生や親は怒りましたけどね（笑）。「無条件で入れたらと言うてくれとんのに！」というわけね。だけど、就職して靴のメーカーに入れば、自分でもっといい靴が作れる。そういう考えを持っていたんですよ。

その頃僕が履いていたのがオニツカ、今のアシックスです。うちの高校に求人が来ていなかったんですが、税理士だった叔父さんの伝手<sup>てづて</sup>でオニツカを訪問

することができました。三年生の五月のことです。亡くなった鬼塚喜八郎会長がまだ社長で、社長室で社長と副社長など三〜四人と面接。面接で聞かれたのは走ることばかり。というのも、オニツカには陸上部があったんです。弱かったけどね（笑）。

「君はナンボで走るんや？」と社長に聞かれて自分の記録を言ったら、すぐに決まりました。だから入社して五年ぐらいいは、仕事と陸上を両方やりました。

## オリンピックは総合力の勝負

——最初から研究室を希望されたとか。

三村 そうです。「どこへ行きたいんや？」と聞かれたので、「研究室でモノづくりの研究をした

い」と答えました。高校では工業化学科だったし、スポンジやゴムなど材料の研究をしてみたいと思っていたんです。三日間ぐらい研修を受けて、辞令をもらったら

「第二製造課」と書いてあるから、「え、研究所と違うんですか？」と言ったんだけど、「ぱっと入ってもダメや。モノづくりを知ってなかったら研究することはできません」と。それに従うしかないので、多品種少量生産の第二製造課に配属されました。すべてを知ってなかったらできない、というような部署ですね。

そこで三〜四年やって、一年だけ最後の工程、仕上げを経験しました。中敷を貼るとか、糊を落とすとか、紐を通して発送するとか、そういうことまでね。それから研究室に行つて、三年目だったかな。その頃週休二日制が浸透してきて、みんながスポーツをやるような環境になってきた。それを見て鬼塚会長が、一点集中主義でトップ戦略をしていかなければいけない、と思われたわけです。それからトップクラスの選手にオニツカの靴を履いてもらえば宣伝にもなるだろうということになっていった。

それをやるためにはモノづくりを知っていて技術もある、しかもスポーツの世界をわかっていて、

選手と話ができる人間でなくてはいけない。だから僕に白羽の矢が立ったんです。

——でもよく若い三村さんが指名されましたね。見る目があったと思います。

三村 僕みたいな勉強嫌いで高校卒業の人間がやることじゃないんですよ、オリンピック選手は。誇りに思わなければいけない。だけど僕は不安だらけだった。マラソンの君原健二選手とか宇佐美彰朗選手なんかの靴を作るんですよ、雲の上の人だと思っていたのにね。こちらから何か提案するなんてとてもムリ。言われたとおりの靴を作るだけでした。

——注文するほうが本当に自分のことを知っていたとも言えないですね。

三村 今考えればね。君原選手は、最初からつま先に穴を開けておいて走ってましたから。寺沢徹選手だって、すごくきつめの靴を履いていて、ひどい外反母趾だったもの。「三村さんがもうちょっと早くアドバイスしてくれとったら」なんて言われましたけどね（笑）。

七九年ごろなら、僕も選手に意見を言えるようになってました。モスクワオリンピック直前ぐらいのときです。その頃になると足の形だけ見るんじゃなく、走り方を見て足形をとる。左右の足のサイズが二ミリ違えば型を変えてました。外反母趾があれば、それにも対応するとかね。

——モスクワオリンピックは日本が不参加でしたが、当時は瀬古利彦選手、宗茂・猛兄弟など有力選手がそろっていました。

三村 僕は三人とも靴を作ってたんです。ほかにもいろいろ有力な選手がいましたね。モスクワオリンピックへの不参加は残念だったけど、僕は瀬古選手ならロサンゼルスオリンピックでもいけると思ってました。

ちょうどその頃、いいナイロンの素材ができていて、暑い口サンゼルス向きだということだ

その靴を履かそうとしてたんです。ところがあのときの瀬古選手は、とてつもないプレッシャーを受けていたんでしようね。科学的トレーニングの手法も取り入れられていなくて、暑さ対策に猛暑の中を走りすぎたために腎臓をこわしてしまつたんですよ。血尿が出るぐらい。結局瀬古選手は、「どうしても布製の靴で走りたい」と言ってきました。それまで布製の靴で負けたことがなかったから、験を担いだんです。

——四年に一度のオリンピックで勝つということは、それほど大変なんですね。国民の期待も集中していましたし。







三村 四年先の何月何日に試合があるというのは明白になっているんです。それに対して目標を持ち、

## 足を見ればなんでもわかる

——三村さんは選手の足を見ただけで、いろいろなことがおわかりになるとか。

三村 調子はもちろんですが、練習をちゃんとしているかどうかもすぐわかります。そういうときは「おまえ、練習してないやろ」と言いますね。

——自立して、自分の目標に向かって努力できる選手は限られるんでしょうね。

計画を立てて組み立てていかなかった。食事、体のケア、トレーニング。いろいろあります。選手自身の努力はもちろん、周りの努力がどれだけあったのか。会社だったら社長、オーナー、部長、競技部長、監督、そのほかいろいろなスタッフ。彼ら全員がどれぐらい真剣にその選手をオリンピックに出すため努力したかが問われる。だから今回の名古屋国際女子マラソンの高橋尚子選手は大変だったんです。全部をひとりでやらないといけないから。指導者もいなかったし。

三村 そうね。例えば有森裕子選手や野口みずき選手なんかは自立してますよ。弘山晴美選手なんかね。やらない人は大体わかるでしょ（笑）。いいことだけ言っても、実際にはやらない。

そういうことを、僕がズバット言つとびつくりされるんです。はつきり言つて、トレーナーとか整形外科の医師がわからないようなことがわかることもあります。整

形外科の先生なら、いろいろな機械を使つて「どこが疲労骨折してる」「肉離れがある」という診断はできます。ただ原因まではわからんでしょう。あるいは痛かったら鎮痛剤を出すとか、注射を打つとか、そういう対応になる。トレーナーにしても、足がちよつと凝つとるぐらいは触ればわかります。僕でもわかりますもん（笑）。それでも、どこが原因だからどういふふうにしろという指導は難しいと思います。

——選手には故障がつきものですね。精神的に追い詰められることもある。それに対してできる限りのことをなさってきたから、信頼されるのだと思います。

三村 有森選手がバルセロナオリンピックで銀メダルをとったときもそうでした。直前になって足のかかとが痛いと言う。「もうダメだから棄権します」って。僕は「ばかたれ！」って言いました。クッションをかかとに入れてね。

それがあの走りでしょ。僕は今までマラソンを見ていて涙が出たのはあのときだけ。バルセロナでは有森、小鴨出水、山下佐知子と女

子マラソンの選手の靴はみんな作つた。エゴロワ選手のも作つたし、男子の金メダルの黄永祚、銀メダルの森下広一選手も作つた。四位の中山竹通、「こけちゃいました」の谷口選手（八位）もね。——すごいですね。

三村 高橋尚子選手がベルリンマラソンで世界最高記録を出したときも、試合の一週間前に「路面が硬いため、今までのシューズでは衝撃が強く足がすぐ疲れます」と電話が来たので、急遽靴を作った。ちょうど三連休だったのを、僕と、それぞれの工程からひとりで休日出動させて作製しました。それでレース二日前に、僕がベルリンまで靴を持っていっただけです。履かせたら「ぴったりです」とのんきに言うんで、これも「ばかたれ！」と。報道陣がいっぱいいましたけどね。それで世界最高記録だから、良かったけど、大変でした。

——それだけのことができるようになるまで、本当にたくさんの足を見てこられました。そのほかに努力や工夫をなさった点は。



みむら・ひとし●1948年兵庫県加古川市生まれ。県立飾磨工業高校時代は陸上部キャプテンを務め、長距離選手としてインターハイ等で活躍。1967年、オニツカ株式会社（現アシックス）に入社、第二製造課に配属され靴作りのノウハウを学ぶ。1974年から一流選手を対象とした特注シューズ製作の専任となる。フットウェア事業部に所属し、2003年より社内にてただ一人グランドマイスターという称号を与えられている。陸上競技にとどまらず、野球、サッカー、モータースポーツ等々多岐にわたるジャンルのシューズを手がける。2004年、厚生労働大臣から「現代の名工」の表彰を受ける。2006年、黄綬褒章受賞。「若いときに流さなかった汗は、老いてから涙となって返ってくる」が座右の銘。

## 選手との心のつながりを重視

三村 努力するというより、興味を持ったというほうが正しいかな。仕事が好きになりましたね。靴に関して、足に関してものすごく好きになったんです。本なんか一冊も読みませんけどね（笑）。ほかのメーカーさんの靴も見ない。僕は一番煎じがいちばん嫌い。見てしまったら、「あのメーカーさんはここをこういうふうにしたな」と真似したくなるもの。

——伺っておりますと、三村さんがいいお仕事をなさるのは技術や経験だけではない、選手とのコミュニケーションによるものが大

——ご覧になるのは過去、ご自分が作られたものだけですか。

三村 そうですね。ほぼ頭の中にインプットされている。新しい素材が出てきたら検討するし、注文も出します。メーカーさんには「まだあかん。作り直してください」って、そればかり。言うこともつらい。その代わり採用するようになったら、宣伝しますからと言って。

きいですね。選手が口にしていることを鵜呑みにせず、本当に言いたいことは何か汲み取る。あるいは、本人も気づいていないことに

気づいて、相手に示していく。その力がないと、いいお仕事はできないんですね。

三村 その通りです。選手の言いなりではないけれど、いろいろなことがアドバイスできないとダメ。選手との接し方も違います。「これはどうですか？」と相手の反応を見ながら話したほうがいいこともあるし、「お前にはこれが合つとるから、これを履け」という調子で渡したほうがいいこともある。

靴づくりも結局は感性の問題です。靴を作るには足を見て、足型をとりますね。それをどういうふうに組み立てていくか。大きな大会に出るような選手の場合、それを考えるのはすべて私の仕事です。足型と素材とデザインを考える。またどういうスポンジを使い、どんなインナーソールを入れるのか、それを決めて現場に指示する。技術的に靴を作る人間はいます。だけど指示するところまで行くのが大変なんです。最終的には選手との会話、選手との心のつながりがないとできない仕事なん

です。

部下にも、「僕が思ったこととおまえらが思うことが違うのは当たり前前から、自分なりのモノづくりを考えていけ。最終的にそれで選手が走りやすく、疲れにくく、いい記録が出て喜ばれたらええんやから」と言って指導してますね。

——選手がオリンピックのコースを試走するのに付いて行かれたそうですね。

三村 まず現場を知らないことにはね。コースの特徴を知って、ふさわしい靴を選手に提供したいと思っています。

——北京オリンピックには世界の有力選手が三村さんのシューズを履いて出場することでしょう。それを見る楽しさも増えました。でも、できれば日本選手がメダルを取ることを祈りたいと思います。

三村 ほんとに僕もそう思っているんですよ。大きな声では言えませんが（笑）。今日はどうもありがとうございます。

聞き手／日本銀行情報サービス局長 恵谷英雄